

令和4年9月15日
横浜創英 高等学校
副校長 本間 朋弘

本校の高大連携の考え方について

本校では、高校を社会で活躍する準備の場に変えていく、社会で必要な経験の場を高校が提供していく、それを基本的な考え方として、学校と社会がつながることを目標としたカリキュラムを構築してきました。近い将来、今ある企業の多くは形を変えていくでしょう。人口の豊かな時代であれば、儲けている企業の真似をしていれば良かった。でも、今の時代は真似事ではなく、人が誰もやっていないことを考え、実行していく力がないと、社会を生き抜くことはできません。

日本の中等教育で連綿と続いてきた広く浅くのリベラルアーツから脱却して、自分の強みや尖がりを高校時代から意識をさせる環境を作っていきたいと考えています。そのためには、高校時代から社会とつながる経験を積ませる必要があり、高大連携はそのための重要な柱であると考えられています。

現在5つの大学と高大連携協定を結んでおり、この秋に法政大学と東京都市大学と高大連携を結び、将来的には20の大学・学部と連携協定を結ぶ予定です。今回のカリキュラムの改訂で、今の高校1年生が3年生になった時の午後は自由選択の時間帯にしましたので、午後の時間帯を利用して高校の段階から大学に通ってほしい。そして、大学で履修したことを本校の単位として認定するシステムを作ろうと考えています。高校1・2年生には大学が設定する長期休業中の集中講座に参加をしてもらっています。

大学に行って一方的な講義を聞くのではなく、大学から与えられた課題に取り組んで、プレゼンや制作物でアウトプットするというスタイルです。協定は、大学の偏差値は関係なく、探究型のプロジェクト学習に取り組んでいる大学と結びたい。7月、高校一年生の8人が産業能率大学のプロジェクト学習に参加してきました。

産業能率大学は、社会に出てからの実践力を伸ばしてくれる大学として高い評価を受けており、経営学部の一年生は毎年5・6月と2カ月かけて課題解決学習に取り組めます。今年のテーマは、石垣島から少し離れたところにある無人島に高校生を修学旅行に誘致するために、SDGSを加味したプログラムを石垣島と連携して作りなさいという課題です。本校の生徒8名が、優秀とされた11組の学生が行うプレゼンの評価者として産能のキャンパスに出かけ、的確な講評をしてきました。

本校の修学旅行は、行先・プログラムの決定や業者とのやりとりのすべてを生徒がやりますので、8名のうち何名かが修学旅行委員になって石垣島のプログラムを作ったら、石垣島という社会と大学生と高校生がつながります。

高校と大学と社会がシームレスな状態になってつながっていく、そうした環境を作っていくことが、創英のやるべき大きな役割であると考えています。